#吉岡進の新世代沖釣り紀行 vol.10

ツリガチ！

TSURI GACHI

東京湾のシーバスジギング

文◎高橋 剛

★ジグを落とす。巻く。落とす……。
東京湾のシーバスジギングはこの繰り返し。
釣り方そのものは簡単だが、だからといって単調というわけでもない。
「絶対に釣れるはずだ」という楽観と、
「厳しいかもしれない」という不安その二つが混じり合いながら、
つまり彼らはガチでシーバスに挑んだ！

「シーバスジギングだね」
「シーバスジギングだよ」
「癒やしの釣りだね」
「癒やしの釣りだ」
「でも……」
「なにこの風……」
「寒いね……」
「冷たいね……」
「厳しそうだね……」

2月24日、朝5時。東京湾奥千葉市寒川港は守山丸の船着き場に集合した我われツリガチ取材班は、10メートル近くの強い北風に見舞われていた。

この港は、都市の奇跡だ。ショッピングモールが連なり、国道357号線とJR京葉線がすぐそばを走るような場所。スーパー銭湯の脇を抜けると、ぽっかりと存在する港。

ツリガチ取材班とは顔なじみの守山丸・金子輝人船長である。船長を交え、朝からひとしきりゲラゲラと笑い話を繰り広げ、場の空気が暖まる。

▲釣り場に到着し、タックルを準備

風は冷たくても、こんなふうに楽しければそれでいいのだ。これでシーバスが釣れればなおよし、なのだが、ここのところ釣果の浮き沈みが激しい。

「シーバスは癒やしの釣り」

我われツリガチ取材班の間には、そんな不文律がある。癒やしの釣り。つまり、「よほどのことがない限り、シーバスは釣れてくれるかわいいヤツ」ということだ。

だが、釣行前日、守山丸は出船していなかったものの、ほかのシーバス船の釣果には「0～」という厳しい表記があった。

「よほどのことがない限り……ってことは、よほどのことがあればシーバスも釣れないときがあるんだよね……」と、ヨッシーこと吉岡進さん。

北風による波しぶきを浴びないようデッキ上部の特等席にデーンと座りながら、不穏なことをつぶやく。

「今日は、よほどの日かもしれない。だってコレ、シケだよ」

白波を蹴立て、巧みにウネリを避けながら守山丸は西へと進んでいた。金子船長は、東京湾を突っ切り、川崎側に向かっている。風が強く、行けるポイントが限られているのだ。

遠くの空は見事に晴れ渡っていたが、我われの間には暗雲が垂れ込めていた。

シーバスをバラすと、群れが散る。暗雲は、より色濃くなった。

小1時間走って到着したのは、アクアトンネルの換気塔、風の塔だった。どこからどう見てもシーバスが着いていそうなストラクチャー周りだ。

釣れる……！

北風が体を奥底から冷やし、指先を痛めつけるが、そんなことを気にする我われツリガチ取材班ではない。「寒いよ～」「指いてえよ～」と弱音を吐きまくりながら、ジグを投入する。

水深25メートル前後。使用するジグは60～80グラ……。

「あっ……！」

状況とタックルを説明するかしないかのうちに弱よわしい声をあげ、竿を曲げているのはライターのタカハシゴーだ。

1投目が着底し、巻き上げ始めた直後のアタリに、おどおどしている。心の準備ができていなかったのだ。しっかりと竿にシーバスの重みが乗ったにもか